



西湖の月（中国江南を旅して）



烏 鎮

中国江南の杭州は南宋の都があったところで、西湖という美しい湖で有名な観光地である。特に西湖に映る月が有名で、旧暦の中秋にあたる10月初めに私はこの地を訪れた。

水の国

成田空港を飛び立った飛行機はまっすぐに杭州国際空港に向かう。この日はあいにくの雨模様で、飛行機は厚い雲の中、窓ガラスを濡らしながら徐々に高度を下げていく。雲の下に出るとようやく郊外の景色が見えてきた。見えるのは一面の田んぼと、西洋風トンガリ屋根の家々。広大な農地の中、あちらこちらに水路が見える。古くから蘇州、杭州など江南の地は農耕に適しており、

中国の食糧生産を担ってきたという。私はこの景色に納得した。

空港から市内に向かう車の中で、出迎えのガイドさんが説明してくれた。「今日はあいにくの天気ですが、ここは水の国ですから仕方ないのです。」



西湖天地

西 湖

杭州は人口約600万人の大都会である。古くは絹織物の産地であるが、運河による物資の流通も盛んであったという。現在はエレクトロニクス産業の集積地で、日本を始め世界中の電気・精密機器メーカーの看板が街中に多く見られる。中国の他の都市同様、ここも建設ラッシュである。多くの建物の上でクレーンが動いている。この街も周囲の人口を吸収し、ますます拡大していくのであろう。

杭州市街地の西側に有名な西湖がある。ここは中国第1級の観光地で、湖の周囲には多くの寺や塔がある。依然として小降りの雨であるが、ホテルに荷物を置き、すぐに西湖に向かった。

市街地に近い湖畔に「西湖天地」というスポットが最近できた。スターバックスやイタリアン・レストランなどの店が並ぶ一帯は中国風の装いが加えられ、なかなかおしゃれな雰囲気である。湖の周囲をめぐる遊歩道にはところどころ柳が植えられ、小雨に映えて大変美しい。ここは蘇軾など多くの詩人が詩を詠んだ湖である。

湖畔の数箇所から観光船に乗ることができる。私の乗った船は湖の中ほどの島に向かった。この島の中には更に4つの小さな池があるという珍しい仕掛けがある。島の中の遊歩道や橋を徒歩で散歩するのであるが、係の人が橋の下に緑やオレンジ



西湖を遊覧する船



淨慈寺の屋根と雷峰塔

の網を張るのに忙しい。2日後再び訪れたときに判明するのであるが、この時点では何のための作業か解らなかった。

寺と塔

遣隋使や遣唐使を初めとして、古来多くの人々が日本から中国に渡った。初めは九州から対馬海峡を越え、朝鮮半島・中国沿岸を伝って行ったが、そのうちに現在の東シナ海をまっすぐに突っ切るルートとなった。目指すのは杭州湾南端に位置する寧波の港である。

曹洞宗の開祖である道元もそのようにして寧波に到着し、難行の末に禅の悟りを開くのであるが、彼の師である如浄は西湖南岸の浄慈寺の住職であった。現在この寺には日本から寄贈された大鐘があり、この鐘の音を聞きながら眺める夕景が1つの名物になっている。

浄慈寺の隣の夕照山に建つ雷峰塔は近年復元された新しい塔である。山の斜面にはエスカレーター、塔の内部にはエレベーターが整備されていて興ざめの感もあるが、疲れている身には有難い。塔の上からは西湖全体を見渡すことができ、このパノラマは必見である。

杭州湾は東に向けてラッパのように大きく開けており、口の部分に相当する所に杭州市は位置し

ている。毎年、大潮と満月が重なると、月の引力によって杭州湾の海水が銭塘江を逆流するという。この景色を眺めるのにちょうど良い場所に六和塔が建つ。こちらは千年以上の歴史ある風格をもち、塔の上までは長い階段を昇らなければならない。足下の銭塘江に鉄橋が架かっており、列車と自動車が通行できるよう2階建ての構造になっている。最近、写真を見た技術畑の知人は「この橋は1キロメートルを越える大きさですね」と即断した。さすが技術者！

京杭運河

中国を代表する土木工事は何と言っても万里の長城であるが、これに肩を並べる大工事を古代の中国人は行った。北京から杭州までの大運河（京杭運河）である。

中国は大国であり、大陸を流れる川の大きさも日本の比ではない。特に黄河、長江という大河が西から東へ流れている。その2大河を貫き約2,500キロメートルに及ぶ運河は西暦610年に完成したとされる。この運河と大河により中国の大地を東西南北に結ぶ水運が可能になった。大運河の建設に多くの人々を動員した隋は、これに反対する唐により滅ぼされるのであるが、江南地方の豊かな産物が運河によってもたらされ、唐の首都



京杭運河の脇に建つ石像

長安の食糧事情は大幅に改善する。

京杭運河の南端に立つ私の前に大きな石像がある。それは満杯の荷物を積み込んだ船を北に向かって曳いて行く姿である。およそ、後世に残る大事業というのはこの運河のようなものを指すであろう。先人の行った工事により、何世代にも亘って人々が恩恵を受けてきたという歴史に比べ、現代の我が国の公共事業はあまりにも近視眼的になっていないか。

烏 鎮

上海、蘇州、杭州などのいわゆる江南地方では、運河沿いに町が生まれた。そういった町の中には、水のほとりで昔から同じリズムで時を刻み、改革の流れとかけ離れて現在に至った所が残っている。今、このような町を「水郷古鎮」と呼び、中国人の間で大変な観光ブームとなっている。因みに「鎮」は中国では県の下の行政単位で、「町」のことである。

これらの「古鎮」は鉄道や高速道路のルートから離れた場所にあるため、公共交通機関を乗り継いで行くのはかなり難しい。最近日本でも「水郷古鎮」は人気が出てきており、パック旅行で訪れることができるようになった。しかし、今回の旅は全くの自由旅行であり、「古鎮」訪問は半ば諦めていた。

初日に空港出迎いのガイドさんから渡されたパンフレットには「オプション・ツアー」がいろいろ載っている。その中に「烏鎮1日観光720元/1人」とあったが、720元×2人=約2万円という料金は滞在中の予算のほぼ全額であり、残念ながら断念せざるを得ない。しかし、捨う神あり。西湖見物からホテルに戻ると受付脇に中国人用のツアー案内があり、料金を訪ねると「125

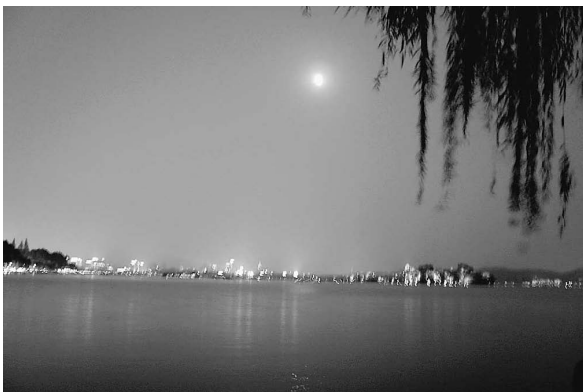
元／1人] (2人で約3,500円) と言う。手許不如意の日本人は即決で参加を申し込んだ。

烏鎮は杭州と上海のほぼ中間にある「古鎮」である。中国政府が保存に力を入れており、町に入るにはチケットを買わなければならない。まるでテーマパークのようであるが、町には現在も人々が生活している。江南地方の家々の特徴は白い壁と黒い柱・梁のコントラストであろう。中国的な強い色彩から距離を置いた落ち着いた佇まいに精神が落ち着く。これは私の直感であるが、道元を始めこの地方に渡った僧たちは、禅の教義と共にこの色彩感覚を日本に持ち帰ったのだ。日本の禅宗寺院にも漂う静謐な雰囲気はこの色彩から生まれている。烏鎮の「烏」は「黒」を表す言葉なのかもしれない。

中秋の月

10月初めは旧暦で中秋にあたる。中国の風習では働きに出た人々も実家に帰省し、家族揃って月餅を食べ月見をするという。現代の日本ではあまり見られなくなった風雅な習慣が今もなお続いていることに心が和む。

しかし、杭州の中秋は雰囲気が特別であった。何と言っても西湖は月の名所である。杭州市内に止まらず中国全土から人々が西湖を目指して来る。



西湖の月



杭州市内

最近では上海から新幹線が開通したので、2時間以内で杭州駅に到着できる。中国国内どこから世界中から西湖にやって来る。かく言う私も現地の月齢を調べ、中秋の名月を求めて日本から飛行機に乗ってやって来た。

昼頃からただならぬ雰囲気であった。市内の道路が異常に混み始めた。クラクションを鳴らしながら車が狂ったように競走する。あちらこちらで事故を見た。人もバイクも自転車も我先に交差点を横切る。西湖が近付くにつれて人の数はいよいよ増えていく。

夕方になると西湖周辺の道は人と車で溢れ、異様な熱気に包まれる。お月様もびっくりして引っ込んでしまいそうだ。遊覧船は満員の乗客を乗せ、湖の中の島に向かう。「あの島も大変な混雑だろう……」と思った瞬間、網を張る作業の目的が解った。混雑のあまり遊歩道や橋から人が溢れ、池に落ちるのだ。

私は西岸湖畔の遊歩道のベンチを2時間前から確保し、月の出を待った。西の山に陽が落ちると、周囲の塔は明りが灯り輝き出す。しばらくすると、中秋の名月が東の空に昇った。湖面に月が映る。多くの船が静かに行き交う。皆が待ち望んだ西湖の月はとても美しい。

(担当：若狭)